



中国西南民族史

5.南詔国による雲南統一③



南詔国の「族属」(民族系統)

- 南詔国は何人／何族の国家か？

(→素朴すぎる疑問?)



南詔タイ族説

- 1890 パーカー (E.H.Parker)
“The old Thai or Shan Empire of the Western Yunnan”, *The China Review XX*
- 1900 スコット (J. G. Scott)
Gazetteer of Upper Burma and the Shan States.
- 1935 クレドネル (Wilhelm Credner)
Cultural and Geographical Observations made in the Thai (Yunnan) Region with special regard to the Nan-Chao Problem



南詔タイ族説の根拠

- 南詔の「詔」は王の意 → タイ語の chao
- 『蛮書』巻8に引かれている数語の「南詔語」
+ (史料5.17)
- 「雲南から南下してきた」というタイ国側の伝説
- 19世紀後半におけるスコータイ王朝の「発見」
↓
- タイ族の国である南詔国(の後身の大理国)がクビライのモンゴル軍によって滅ぼされた結果タイ族が東南アジア大陸部に南下移住して国をたてた(「タイ族の沸騰」)



南詔タイ族説に対する懐疑

- 1904 ペリオ (P.Pelliot)
“Deux itinéraires de Chine en Inde : a la fin du VIII^e siècle”, *BEFEO IV*
南詔タイ族説に対する懐疑を表明
- 1929 グルッセ (René Grousset)
Histoire de l'Extrême-Orient
南詔を口口族の国であるとするマスペロ (Georges Maspero) の説を紹介



南詔タイ族説に対する反論

- 多くの中国研究者が南詔国はタイ族の国家でないことを主張
 - 凌純聲《唐代雲南的烏蠻与白蠻考》
(《人類學集刊》1-1, 1938)
 - 方國瑜《南詔是否泰族國家》
(昆明《新動向》3-6, 1939)
 - 許雲樵《南詔非泰族故國考》
(《南洋學報》4-2, 1947)
 - 江応樑《南詔不是傣族建立的国家》
(《雲南大学学報》, 1959-6)



中国における議論

- 南詔国がチベット・ビルマ語系民族の国家であることは一致するものの、**彝族の建てた国か白族の建てた国かで議論が分かれる**
- 彝族説……劉堯漢・王叔武・呉恒・李紹明・
祁慶富・黄惠焜・李霖燦(台湾)ら
- 白族説……方国瑜・楊永新・趙寅松・陳碧笙ら



「民族系統」とは何を指すか？

- 南詔王族の民族系統＝南詔国の民族系統でいいのか？
- 馬長寿《南詔国内的部族組成和奴隸制度》
(上海人民出版社, 1962)
 - 南詔国が**多民族国家であり, さまざまな要素を包含**することを強調
 - 社会制度的には時代が下るほど封建制の要素が顕著になってくるが, 基本的には奴隸制であったと主張



南詔政権の構成 (再出)

- 王 族: 蒙氏「自言本永昌沙壺之源也」
- 哀牢人?
- 父子連名制からみれば**烏蛮系**

- 重臣層: 「西洱河蛮」
- 洱海南方の肥沃な盆地 (祥雲・弥渡) の農耕民,
白蛮系
- 「白子国」の主要民族



南詔政権の構成

- 唐初の白子国
= 洱海南方の有力氏族連合：
西洱河蛮・漢姓（唐代以前の移民？）中心
- 蒙氏は張氏王権を継承＝文化的にも強い影響
- 数的には圧倒的に白蛮系が多い
← 『南詔徳化碑』（766）碑陰の官員名簿など

- 蒙氏＝烏蛮／烏蛮＝彝族の先民
→ 南詔国＝彝族の国家と単純化できない



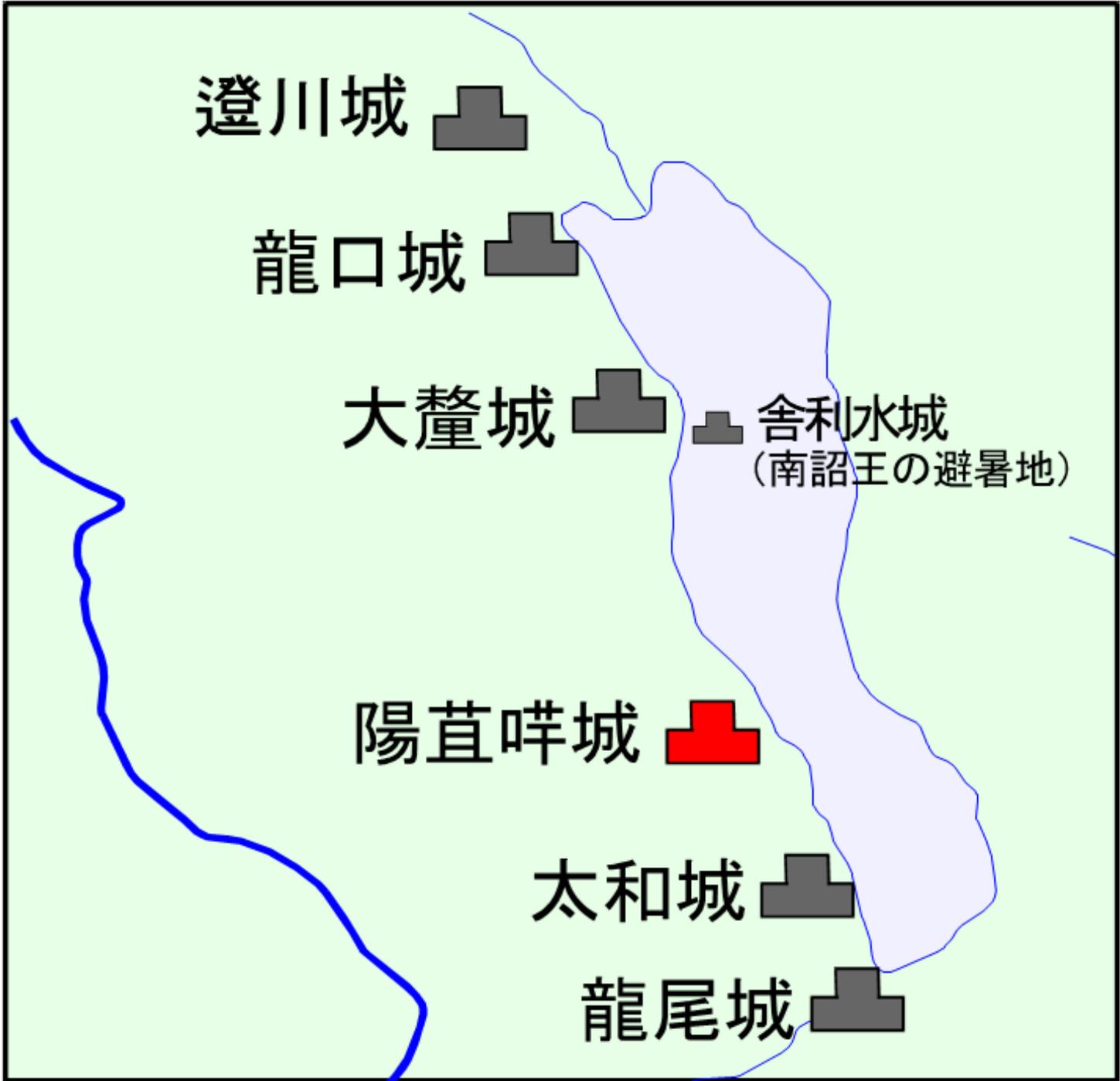
南詔国の国都

739 太和城建設

764 陽苴咩(ようしょび)城の建設・遷都
(太和城北15里)

- 陽苴咩城の北40里に大釐城
(もと「河蛮」の城邑, 皮羅閣の時占拠)
- 洱海の南端・北端に龍尾城・龍口城
- 龍口城の北15里に遼川城

→都城に対する二重三重の防備 (史料5.18)



遼川城

龍口城

大隆城

舍利水城
(南詔王の避暑地)

陽苴咩城

太和城

龍尾城

龍尾城の城門





首都地区住民の多様性

- 蒙氏(哀牢人?)を初めとする**烏蛮**
- 洱海東南出身の**西洱河蛮(白蛮)**(重臣層を構成)
- **河蛮**: 洱海西岸の先住民
- 強制移住させられた**周辺民族**(の上層部)
(史料5.19)
- **漢人**: ①漢代以来の移民の子孫
②鄭回を代表とする流亡漢人
③天宝期の唐軍の逃亡兵



共通の言語・文化の形成

- 多様な住民の間に共通の言語・文化の必要性
- 『蛮書』巻八
「言語の音は白蛮が最も正しく、蒙舎がこれに次ぐ。それ以外の諸部落はこれに及ばない。」

→「最正」とは何か？



唐代洱海地区の言語

- 「最正」: 以前の研究では
 - 白蛮の文化程度が高い
 - 白蛮がもっとも漢文化の受容度が高い

- 「名物或与漢不同, 及四声訛重」と言うからにはここでは漢語を操る能力を言っているのであって彼ら自身の言語のことではない。



唐代洱海地区の言語

- 上層の**共通語**=漢語+民族語語彙
「但し物の名前は漢(=中原)と違う」
- 中下層の共通語=民族語+漢語語彙(?)



漢語成分の重要性

- この時期に漢語が大量に流入したことは確か現代白語（大理白族の言語）の基本語彙の70%は漢語起源, そのうちに唐代音もかなり含まれる

■ わたし	ngaot	【 = 「我」 = 「汝」 = 「人間」 】
■ あなた	naot	
■ 人	nid gerf	



漢語・漢文化の役割

- 言語以外の文化面でも漢文化を基本とする
 - 白蛮文化=古くから漢文化の影響を受けた洱海地区の文化(白蛮自体が漢族移民の子孫?)
 - 支配階層の子弟が大量に成都留学
 - 鄭回ら亡命知識人の果たした役割
- 多民族雑居の政治的中心において、漢語・漢字が「つなぎ」の役割をはたした



「白語」の形成

- 漢語を操るのにたけた「白蛮」が政治・文化などの中心的役割をはたす
→ 彼らの言語＋漢語をもとに「白語」が生まれる
- 白語を話す人々＝白族（→現代白語の表現）
民族の識別＝言語を基準とする
- 大理で生まれた白族が各地に広がっていく



白族はいつ頃形成されたか

南詔国後期・大理国期 (9世紀後半～13世紀前半)

- 洱海地区で白蛮・烏蛮の名称が使われなくなる



次第に民族間の区別が意味をなさなくなり、
共通の言語・文化を核として一つの民族に融合



元代:「白人」「僊人」
現代白族の直接の祖先
(李京『雲南志略』)



「則白人之為僰人，明矣。」

- 『雲南志略』の論理 (史料5.20)
 - 今(元代)の中慶・威楚・大理・永昌は漢代に開かれた「僰道」(故僰侯国の地)の南側(中原から見て「奥」)にあるため、**元来皆僰人の住地**である
 - 「僰人」が転じて「白人」(元代白族先民の呼称)となった
 - 「白人語」には「古い漢語の訛ったような言葉」が非常に多い(「**如此之類甚多**」)



『雲南志略』の論理

- したがって、現在の「白人」が（漢王朝と関わりを持った）古代の「僂人」の末裔であることは明らかである



中国研究者が漢代の「僂人」を白族の起源に結びつける最大の根拠



どこまでが「史実」なのか

- 漢代 (< 秦代) の「僰道」(今の宜賓)にかつて「僰人」の国(僰侯国)が存在したこと
- 元代の洱海地区の住民が「僰人」「白人」と呼ばれること(「僰」と「白」は古い雲南漢語では同音)



この二つは「史実」だとしても、
両者を結びつけたのは李京の「見解」に
すぎないのでは？

大理古城の街角にて(2009年)





白族の古民家（現在はホテルとして利用）







安史の乱(755~762)後の唐王朝

- 節度使を内地にも配置
(元来は辺境防衛のための軍事施設)
- 単に大きな兵権を保持するだけでなく、
広域の地方民政・財政権を持つ
「藩鎮」(はんちん)



藩鎮と唐王朝

- 中央から自立の傾向を示すものも出現

「反側の地」(特に東北部)

↑ ↓

「順地」(主に江南) ← 唐王朝の経済基盤

- 藩鎮の抑圧と財政の立て直しが唐王朝の国内的課題

780 両税法



両税法

- 主戸（本籍に住んでいる農民）・客戸の区別なく、資産額に応じて戸等を決定し戸税を徴収，耕地面積に応じて地税を徴収。また，有産の客戸を主戸に編入した。
- 六月に納める夏税（対象は絹・綿・麦）と十一月に納める冬税（対象は稲と粟）に分け，それ以外の税を全廃する。
- 銭納を原則とする。
- 商人に対しても資産に応じて徴収。行商からは30分の1税を徴収。
- それまでの「量入制出」（歳入の額に合わせて歳出を決める）から「量出制入」（歳出を割り出して，それに応じて税額を決める）に転換する。



徳宗－李泌の対外政策

- 徳宗 (在位779～805)
両税法施行後, 藩鎮の弾圧をはかるが失敗
- 対吐蕃政策: 宰相李泌の建言 (787) (史料5.21)
→ 回紇・雲南・大食・天竺と結び吐蕃を包囲攻撃
- 同年, 西川節度使韋皋 (いこう) が着任
「東蛮」を通じて雲南の状況を探る
→ 上奏「以離吐蕃之党, 分其勢。」
→ 李泌の建言のヒントになった?



雲南側の事情

779 閣羅鳳死し, 異牟尋が継ぐ

→吐蕃と共に四川に侵入して唐軍に大敗

(史料5.22)

■ 吐蕃:

■ 唐に対する軍事行動のたびに雲南から物資を徴発し, 戦時も前鋒に立たせる

■ 要害に城塞を築いて兵員を挑発

→「雲南これに苦しむ」

(史料5.23)



雲南側の事情

- 亡命漢人の鄭回, 清平官となり南詔王異牟尋に唐への帰順をすすめる。
↓
- 四川南部の少数民族「東蛮」を仲介とした韋皋とのやりとり(787~792)
↓
- 吐蕃との関係悪化(唐使の雲南滞在を知られる)



再帰唐実現の経過

793～794 異牟尋, 正式に唐への帰順を願う
書信を送る

794 祠部郎中袁滋が冊南詔使として雲南に赴き
異牟尋を南詔王に冊封 (→『雲南記』の撰者)
金印(「貞元冊南詔印」)を与える

(史料5.24)

■ ただちに対吐蕃共同作戦開始

雲南の吐蕃勢力を金沙江以北に駆逐

鉄橋節度の増置

(史料5.25／5.16)